

ベンガルのシヨステイ女神の儀礼

外川 昌彦

1 はじめに

ヒンドゥー教の女神であるシヨステイ女神は子供を守護する女神とされている。そのためインドのベンガル地方では、とりわけ子供の出産・成長に関わる様々な局面で、このシヨステイ女神への儀礼が行われている。また同時に、シヨステイ女神は子供を持つ母親によって祭祀が行われるとともに、子供の出産に関わる女神として、子宝に恵まれない女性にとっては、その恩寵を祈願する女神ともなっているのである。このように、シヨステイ女神は、ベンガルの民俗社会においては、人々への災因と除災という両義的な機能を担う神格となっており、モノシャ女神やカリ女神と並ぶベンガルの代表的な民俗神として、広く人々に親しまれるものとなっている。¹

このようなヒンドゥー社会におけるシヨステイ女神の祭祀の起源については、多くの議論がなされている。例えば、シヨステイ女神についての言及は、古くは『デーヴィー・ヴァーガヴァタ』や、『ブラフマン・ヴァイヴァルタ・プラーナ』に見られることが知られている [Das 1953: 36-7]。これらの文献は、13世紀以降の編纂と考えられている。さらには、これは考古学的仮説に過ぎないが、マッケイは、インドの農村部で観察される子供の出産を司り家を守護する女神の起源を、一気にモヘンジョダロの時代にまで溯ると推測している [Mackay 1948:54.]。とりわけベンガル地方では、14世紀以降に様々なヴァージョンが生み出される中世の民衆説話の世界である『吉祥詩 (モンゴル・カッポ)』の中で、シヨステイ女神の名前がしばしば言及されるようになる [Maity 1989:66]。これらの説話の中では、特にモノシャ・モンゴルやチョンディ・モンゴルなどが、シヨステイ女神について言及していることで知られてきている。また一般には、ベンガル地方では、『プロト物語』と呼ばれる民間の普及本に、このシヨステイ女神の霊験説話やその祭祀の様々な方法が述べられている。これは、いわゆる口頭伝承として伝えられた地方の様々なシヨステイ女神に関する説話をまとめたものであり、今日ではカルカッタを中心に数多くの種類の本が出版されている。² このように、これらの文献上の記録からも、シヨステイ女神の信仰が、ベンガル地方の民俗社会に深く根づき伝承されていることが伺える。

本稿では、このようなシヨステイ女神に関わる様々な儀礼を取り上げて論じている。とりわけ農村部で伝承されたシヨステイ女神の祭祀に注目し、現地調査の資料に基づいて検討するものである。ところでこのシヨステイ女神の祭祀は、大別すれば出産も含めた子供の通過儀礼に関わる一回性の儀礼と、年中行事の一部に組み込まれた周期的な儀礼の二つに分けることが可能である。³ 本稿では、紙幅の制約から特に後者の年中行事の中に組み込まれたシヨステイ女神の儀礼、すなわちシヨステイのプロト儀礼を取り上げている。本論では、始めにベンガル地方で一般的なシヨステイ・プロト儀礼の様々な内容を検討し、それを調査村の事例に即して検

討している。続いて、特にオショク・ショスティの儀礼を取り上げて、具体的に検討を行うことにする。

なお、ここで取り上げる資料は、すべてインド西ベンガル州ボルドマン県モンゴルコート地区にあるキログラム村 (Kshiragram, J.L.No.127,128 and 129) の事例に基づいている。ボルドマン地方は、ベンガル地方でも肥沃な水稻耕作地帯として中世から知られており、この調査村も冬作を主体とし二毛作やラビ作も可能な農村地帯にある。村落社会は、18のカースト集団から構成されており、人口は4,263人(1991年センサス)である。これはベンガル地方においては中規模の村落といえるものである。

2 プロト儀礼におけるショスティ女神

年中行事の一貫として周期的に行われるプロト儀礼として、ショスティ女神に関する一群のプロト儀礼が存在する。⁴ これらは、すべてベンガル月の各月の白分6日に行われる儀礼「ショスティ」として総称され、既婚女性によって行われるショスティ女神に対するプロト儀礼として様式化されている。このことから明らかなように、その元々の形は、ベンガル暦における12の各月の白分6日におけるショスティ女神への祭祀にあると考えられる。「ショスティ」という名称が、そもそもベンガル語で「第6番目」という意味であり、これは、ベンガルの暦に当てはめると白分の6日目という意味を持つのである。従って、理論的には年間を通した12種類のショスティのプロトが存在していることになる。また実際、そのような伝承は、農村部ではしばしば耳にすることができる。以下の表は、シラ・ボシャクの説に従い、この12のショスティ女神のプロトとその主な祈願内容をまとめたものである [Basak 1995]。

ベンガル月	ショスティ名	祈願の内容
ボイシャク	ドゥラ (dhula)	子供を埃や砂 (dhula-bali) から守る為の儀礼
ジョイシュト	オロンノ (aranya)	子供たちが不時の死を迎えないように行う儀礼
アシャル	コラ (kora)	子供の誕生を祈る儀礼
スラボン	ロトン (lotan)	子供たちを不時の死から守る儀礼
バドロ	マタニ (mathani)	子供が富みに恵まれるように行う儀礼
アッシン	ボドン (bodhan)	ドゥルガ女神による子宝を授かる祈願による
カルティック	ゴト (goth)	牛飼いの母が行う、牛飼いの子供たちが放牧地で無事にいるように祈願する儀礼
オッガン	ムラ (mula)	子供たちが無事であるように行う儀礼
ポウシュ	パタイ (patai)	子供が病気にならず、不時の死を迎えないように
マク	シトル (shital)	(一般に、家族の不幸がなくなるとされる)
ファルグン	オショク (ashok)	悲しみが無くなるように行う儀礼
チョイトロ	ニル (nil)	子供の寿命が伸びるように行う儀礼

これらはすべて、例えばオロンノ・シヨステイのように後ろに「シヨステイ」の名を付けて呼ばれている。この表のように、12の月のシヨステイという観念はベンガルでは一般的なものである。しかし実際には、それぞれの地域社会や一族の祭祀において、これらのすべてのシヨステイ儀礼が網羅的に行われているわけではない。例えば、ボドン・シヨステイは、ドゥルガ女神祭祀のシヨステイ・ボドンの日に行われるプロトとされている。そのため一般には、これはドゥルゴ・シヨステイの名前で知られている。しかし、現実には、ドゥルガ女神祭祀の一部にも組み込まれているため、その女神祭祀としての区別が不明なことが多い。⁵ とりわけ今日一般的な、コミュニティのドゥルガ女神祭祀の場合、一般に4日間の儀礼として行われるため、既婚女性の断食・潔斎は白分9日のノボミの儀礼に重点が置かれ、シヨステイから断食を行う例は少なくなっていると考えられるのである。

ベンガル地方で、今日一般的なシヨステイのプロト儀礼は、8種類ある。このことは、広く普及しているプロトの儀礼書のほとんどが、一致してこの8つのシヨステイを記述していることからわかる。このことを、アシュトシュ・モジウムダルは、「12の月のそれぞれに、シヨステイの儀礼を行う規則があります。しかし、私たちのベンガル地方では、ポイシャク月、アシャル月、カルティック月、ファルグン月にはシヨステイの儀礼は行いません」と述べている[Majumdar 1992:31]。また、プロトの物語としてベンガル地方で知られているものも、多くが8つのシヨステイのみとなっている。しかし、調査村では、実際に観察されるシヨステイ・プロトの儀礼は6種類のみとなっている。その他のものについては、プロト物語の伝承については知られているが、実際に儀礼が行われることはない。このようなことから、以下の記述では、調査村で観察されているプロトに限定して検討している。

3 調査村のシヨステイ儀礼

調査地で実際に観察される、シヨステイはジャマイ・シヨステイ (*jamai-sasthi*、ジョイシュト月)、ロトン・シヨステイ (*lotan-sasthi*、スラボン月)、ゲトゥ・シヨステイ (*ghetu-sasthi*、バドロ月)、シトル・シヨステイ (*shital-sasthi*、マグ月)、オショク・シヨステイ (*ashok-sasthi*、チョイトロ月)、ニル・シヨステイ (*nil-sasthi*、チョイトロ月)の6種類である。その他に、ムラ・シヨステイ、パタイ・シヨステイなどは、村人によってかつて在ったのかもしれないと言われているが、現在ではそれが行われていたことを記憶する村人はいない。ドゥルゴ・シヨステイについては、調査村では長期にわたるドゥルガ女神祭祀の儀礼過程が今日でも観察されるので、その中の一貫としてシヨステイ儀礼を見出すことも可能である。以下に、調査地のシヨステイにおける禁忌の内容と祭祀の行われる場所を表にしてまとめた。

調査村におけるシヨステイ儀礼の禁忌内容の対比

シヨステイ	禁忌内容 (食べて良いもの)	禁忌の範囲	祭祀の場所	御神体
オロンノ	ご飯や肉魚 (菜食)	既婚女性	シヨステイ・トラ	オッソット木
ロトン	火を使った食事 (乾いた食事)	既婚女性	司祭の家	シヨステイの石

ゲトゥ	通常の断食	既婚女性	沐浴場	木のシヨステイ
シトル	温かい食事 (冷たい食事) 乾いた食事 (水に浸した食事)	家族全員	各世帯の台所	石臼 (シル・ナ)
オシヨク	ご飯 (小麦粉の食事)	既婚女性	司祭の家	石臼 (ナ)
ニル	ご飯 (小麦粉の食事)	家族全員	シヴァ寺院	(リング)

(成人女性のみ)

今日の農村社会の多くでは、季節の節目にあたる、上記のような5種類から6種類のシヨステイ・プロトが選択的に行われているのが一般的である。現に、12種類のシヨステイを整理したレボティモホン・シヨルカルも、この12種類でシヨステイ儀礼のすべてを網羅した訳ではなく、その他にも時期や地域によって、多様なシヨステイが知られていると述べている [Sarkar 1995]。調査地でも、ニル・シヨステイは、一般にはチョイトロ月のガジョン祭の一部として認識されることも多く、ここでは男性も断食・潔斎を行う例が多く見られる。また、ジャマイ・シヨステイは通称として良く親しまれている名称であるが、実際は、オロンノ・シヨステイと呼ばれるものである。⁶ ジャマイ・シヨステイは、厳密には結婚したばかりの娘の婿を家に呼んで儀礼的な歓待を行う行事であり、別なものである。しかし今日ではこちら方が一般的であり、村内ではジャマイ・シヨステイが、バグディ・カーストを含めて広く行われているが、そのすべての世帯でオロンノ・シヨステイが行われている訳ではない。

季節の巡りの中で見ると、ジャマイ・シヨステイはまだ夏の暑い時期に行われている。ゲトゥ・シヨステイは雨季の終わりに、シトル・シヨステイは冬の最も寒い時期に行われる。オシヨク・シヨステイは花盛りの春に行われる。ニル・シヨステイは暑くなり始めたチョイトロ月に行われるという対比ができる。それぞれが、ベンガルの季節の巡りと密接に結び付いて、季節の推移の節目に行われていることがわかる。とりわけゲトゥ・シヨステイは、これが無事に済むことによって長くうっとうしい雨季が終わると村では説明されている。また、シトル・シヨステイは、その儀礼にともなって伝承されるプロトの説話や食物などの禁忌の内容から、寒い冬の時期に、むやみにお湯で沐浴をしたり、温かい食べ物を食べたがる女性を戒めるという意味が含まれていることがわかる。

祭祀の行われる場所を見ても、いわゆるシヨステイ儀礼の行われるとされる村落のシヨステイ・トラで、実際にシヨステイの儀礼が行われるのは一年に一度だけであることがわかる。その他には、司祭の家のベランダではロトン・シヨステイとオシヨク・シヨステイが行われる。その他は、シトル・シヨステイでは、シヨステイ儀礼に参加する成人女性の家で、それぞれの台所に祭壇が設けられて行われる。ニル・シヨステイでは各集落にある一族に関係の深いシヴァ神寺院に向いて、供物が捧げられる。ゲトゥ・シヨステイでは、村のシヨステイ・トラの目の前にあるキルディギイ池の沐浴場が、この儀礼を行う場所選ばれている。これは、この池がジョガッ女神の住まう村で最も聖なる池とされていることとも関係していると考えられる。ともかくこのように、西ベンガルの集落を訪ねると、どこにも必ずシヨステイ・トラと呼ばれる子授けと結び付けられた祭壇を見かけるが、これはオッシュットの木などの古い樹木の

根本に設けられていることが多い。

このオロンノ・シヨステイが樹木の根元であるということは、他のシヨステイが何らかの礼拝物を伴うのと対照的である。すなわち、ロトン・シヨステイは、文字どおり「シヨステイ・マー（シヨステイ女神）」と呼ばれる、石臼形の黒い石が、シヨステイ女神の御神体となる。またゲトゥ・シヨステイでは、ガーチ・シヨステイ（木のシヨステイ女神）と呼ばれる木の棒が池の浅瀬に立てられて、女神の御神体として礼拝の対象とされる。これらの御神体は、普段は司祭の家の祭壇にシヨステイ女神として祭られているものであり、日常的に司祭の妻によって祭祀が行われている。そして、この一年に一度のシヨステイの日になると祭壇から運び出されて、戸外で祭祀が行われるのである。

さらにシトル・シヨステイでは、それぞれの家の台所がシヨステイ女神の祭壇となっている。この時には、竹の葉が敷かれた上に、ベンガルの石臼であるシル・ノラ（碾き臼の台座と石の碾き棒）がシヨステイの御神体としてお祭りされる。家庭の女性たちが、普段から最も親しんで家事に用いている石臼が、ここでは御神体となるのである。ところが、翌月のオシヨク・シヨステイでは、司祭の家のノラ（石の棒）が御神体となり、この時にはノラだけがベランダに立てかけられて祭祀が行われる。そして、最後のニル・シヨステイでは、特定の御神体はなく、シヴァ神のガジヨン祭と重なる形で、シヴァ寺院の御神体であるリングへの祭祀が行われるのである。次に、このようなシヨステイの儀礼過程を、その中のひとつであるオシヨク・シヨステイの儀礼を事例に取り上げて検討してみよう。

4 オシヨク・シヨステイ (*ashok-sasthi*)

オシヨク・シヨステイの行われる日には、祭祀を行うブラフマン司祭の家のベランダに祭壇が築かれて儀礼が行われる。この時に、祭壇で祭祀を行うのはブラフマン司祭の妻に当たる女性司祭であり、供物を捧げ女神に礼拝を行うのは、主にその司祭の家の檀家（ジャジマン）にあたる家の女性たちである。女性たちは、手に手に供物のお皿を持ちより、女神の祭壇に額づき、供物を捧げるのである。このオシヨク・シヨステイにおいては、祭壇には司祭の家で用いられている石臼のシル・ノラのノラ（石の碾き棒）が御神体として立てかけられる。そのためブラフマン司祭の妻は、早朝から沐浴を済まして、シヨステイ女神の祭壇の準備をする。この祭祀は、朝から始められ昼過ぎまでに終了する。

このシヨステイ女神の祭壇は、普段は家のベランダとして用いられている場所に作られる。まず壁やベランダが女性司祭によって奇麗に掃き清められ、牛の糞を練ったゴボルが塗られて浄化される。そして、一面に儀礼装飾のアルポナが描かれて、その中央にはガンジスの土の塊が置かれる。この土の塊の上に、石臼のノラが壁に垂直になるように立てかけられるのである。これが、シヨステイ女神のご神体となる。ノラには、芥子油、赤い染料のシンドゥール、ヨーグルト、ウコンが塗られる。また、ハイビスカスなどの花が捧げられ、ポテ・ガーチが供えられる。また、礼拝者の額に聖別の印（フォタ）を与えるために、ガンジスの土には、ウコン、芥子油、白檀などが混ぜ込められる。

さらに祭壇には、シヨステイ女神の祭祀のための、しんちゅうの壺が据えられる。壺にはガ

ンジスの聖水（ゴンガ・ジョル）が満たされて、マンゴーの葉が挿される。これにもやはり、シンドゥールやウコンなどが塗られる。その他、祭壇の前には線香や灯明が用意される。供物には、チョラ豆、バナナ、米、キュウリなどが供えられる。特にこのオショク・ショステイの儀礼に際しては、クンリ（*kunri*）と呼ばれるオショク・ガーチの花の乾いた芯とバナナが必ず必要である。その他には、リンゴ、マンゴーなどの季節の果物、モンダ、パタシヤなどのお砂糖菓子が捧げられる。

各世帯から持参される供物も、基本的には上記の供物の内容と同じである。女性は、これらの供物を皿に山盛りにして、祭壇の女性司祭に渡す。女性司祭は、このなかからまず芥子油、シンドゥール、ウコンなどを取って女神の祭壇で祭祀を行い、残りを祭壇の供物の山に加えてショステイ女神に捧げる。次に、ウコンや白檀を混ぜたガンジスの土を使い、女性たちに額の印（フォタ）を与える。人々は、祭壇に額付き礼拝（プロナム）の所作をする。最後に、供物の山からその一部を取り上げて供物のお下がり（プロシャド）として、女性たちに渡す。この時に、バナナとクンリの供物が必ず加えられる。供物のお下がりであるプロシャドは、女性が持参して女神に捧げられた供物と比べると、そのごく一部の量に過ぎない。そのため、次々と訪れる女性たちによってもたらされた供物の山は、祭祀が終わるお昼頃には、かなりの量になる。調査地の家のひとつの祭壇だけでも、お米だけで、およそ2籠分（ジュリ）になり、これはおよそ40kgほどになる。すべてを合わせると、ベランダの祭壇の前に、大きな供物の山ができるほどの量となる。

供物のお下がりのうち、特にひと切れのバナナにオショク・ガーチの花芯であるクンリを押し込んだものが作られて、チョラ豆と一緒に渡されることが重要である。このクンリの入ったバナナは、それを食べると不妊の女性でも子供が授かるなどの、ショステイ女神の靈験があると考えられている。また、女性司祭は、女性たちにウコンや芥子油を混ぜたガンジスの土で、額の印（フォタ）を与えるが、女性達はそれを家に持ち帰り、同様に家人の額にフォタを与えるのである。女性司祭と同様に、多くの女性達も、朝からこのショステイ・プロトのための断食をして準備をする。また、朝から断食をした女性は、この日は祭祀の後で、小麦の食事（モエダ）を食べても良いとされている。

5 考察

ここでは、以上の調査村で観察されたショステイ・プロトの資料に基づいて、これらの儀礼組織の特長を簡単に検討してみたい。特に、ここではその年間を通じた祭祀の構成と女性による祭祀という2つの点について述べてみたい。

第一は、ショステイ女神の祭祀においては、その神格を象る神像は存在せず、壺へのプジャ儀礼は存在するが、神格へのビショルジョンは行われないなど、一般のプジャ儀礼とは異なる様々な特徴が指摘される。特に祭壇には、神像の代りに女性が日ごろから親しんでいる台所道具の石臼（シール・ノラ）がその御神体に用いられ、特別な石や棒などが御神体として用いられている点などが指摘される。また、調査村で年間に6回行われるショステイ儀礼を比べてみると、それぞれに異なる祭祀の形態を持ち、そのたびに異なる御神体が祭壇で女神の象徴

とされていることが注目される。このことは、祭祀の場所にも当てはまり、シヨステイ儀礼においては、年6回のシヨステイ儀礼の度に、場所を変えて祭祀を行っていることがわかる。これらのことは、通常の中行事であるプジャ儀礼とは異なり、このシヨステイ女神の祭祀が、年間を通した一連の儀礼のセットとして行われていることを示すものとなっている。

第二は、オショク・シヨステイの事例に明らかなように、調査地のシヨステイ・プロトは、常にブラフマン司祭の妻である女性司祭によって儀礼が行われていることである。このシヨステイの儀礼に関する限り、女性以外の成員が、たとえそれが司祭（プジャリ）の夫であるブラフマン司祭であっても、儀礼の上で役割を担うことはまれである。また、女神に供物を捧げるのも、各家庭の女性たちとなっている。この意味では、このシヨステイ女神祭祀においては、女性による自立した祭祀体系が構成されていることが理解されるだろう。少なくとも、男性司祭の介入を回避して、女性による祭祀の主宰とその祭祀への参加という一定の自立した祭祀組織が、女性たちによって構成されている点は興味深い。このことは、女性司祭が、この祭祀を行うに当たって既婚のブラフマンであることが祭祀の条件となりながら、しかし、寡婦（ビドワ）となった後も、引き続き祭祀を継続していることから伺える。ここでは、祭祀を行う女性は、既婚女性やブラフマン司祭の妻という位置づけではなく、ブラフマンの成人女性、あるいは子を持つ母親であることが女性司祭であることの条件となっているのである。

このように、シヨステイ女神には、通常男性司祭が主導するプジャ儀礼とは、決定的に異なる性格を持つことが理解されるだろう。このことは、司祭とその祭祀の担い手となる礼拝者の女性達との関係とともに、シヨステイ女神の祭祀の性格を理解するための重要な手がかりを与えるものといえるだろう。⁷

6 まとめ

以上の考察から、シヨステイ女神の祭祀は、年間を通した様々なシヨステイ女神への祭祀の組み合わせとして構成されていることが理解される。このことは、特定のシヨステイ女神の祭祀の礼拝形態よりも、年間を通した一連のシヨステイ祭祀の構成や、祭祀形態における礼拝物や礼拝方法の組み合わせの仕方の方が、この祭祀の性格を考える上でより重要であることを示唆するものとなっている。

例えば、従来シヨステイ儀礼について、西ベンガルでは戸外のシヨステイ・トラで祭祀が行われ、東ベンガルでは、家の中に壺を置いて祭祀が行われるという地理的分布に基づく説明がなされていた。⁸ しかし、一年を通したシヨステイ儀礼の構成や分布を見ると、特定のシヨステイでは、西ベンガルでも家の中でシヨステイ儀礼が行われることがあり、また戸外で行われることがあるのである。ここではむしろ、様々な場所への意味付けによって、女性たちの手によって、村落社会の中で祭祀が循環して行われている点が重要であるといえるだろう。シヨステイ女神の祭祀形態は、このような年間を通した祭祀サイクルを総体として検討することで、初めて通常のプジャとは大きく異なる、その独自の祭祀の特徴が理解されるといえるだろう。

また、シヨステイ女神のプロト儀礼においては、女性の存在が欠かせない点が重要である。ベンガルのプロト儀礼として代表的なビポッタリニ・プロトの儀礼のように、男性司祭が最終

的に祭祀の権利を握り、額の印（フォタ）の授与にも関与するのは対照的に、ここでは祭祀を行うのはもっぱら女性司祭であり、フォタの授受もこの女性司祭の手で行われているのである。⁹ このことは、この女神祭祀がとりわけ女性司祭によって執り行われて、女性を中心として祭祀体系が構成されていることから明らかである。このようなシヨステイ女神の祭祀組織においては、なによりもシヨステイ女神が常に子供に関わる神格であることと関連していると考えられる。とりわけシヨステイ女神は、不妊の女性に子供を授けたり、子供の出産を司りまた子供の成長を見守るという意味で、もっぱら子供の出生に直接関わる女性によって担われる儀礼と見なされるようになっていく。このことが、女性を主体とした祭祀組織の形態にも反映しているといえるだろう。¹⁰

【参考文献】

Bhattacharyya, Asutosh

1948 The Cult of Sasthi in Bengal. *Man in India*. pp.153-165.

Basak, Shila.

1995 Meyeli Brate Lokacar. *Meyeli Brata Bisaye*.(Ed.) Sanat Kumar Mitra.

Kalkata: Pustak Bipani.

Das, Sudhir Ranjan

1953 *Folk Religion of Bengal, Part 1-I*, Calcutta: S.C.Kar.

1958 Folk Religious Rites: A Study in Origins. *Journal of the Department of Letters*. University of Calcutta. Vol.II-2. pp.79-196.

Das, Sunil Kumar

1995 Meyeli Brata-Anushthan. In *Meyeli Brata Bisaye*. (Ed.)Sanat Kumar Mitra.

Kalkata: Pustak Bipani.

Mackay, E.J.H.

1948 *Early Indus Civilization*,2nd ed. London.

Majumdar, Asutosh(ed.)

1992 *Meyeder Brata-katha*. Calcutta: Deb Sahitya Kutir.

Maity, Pradyot Kumar

1989 *Human Fertility Cults and Rituals of Bengal*. New Delhi:Abhirav Publicationo.

1995 *Samaj o Sanskritir Ruparekha*. Kalkata: Purbadri-Prakasani.

Ray, Sudhansu Kumar

1961 *The Ritual Art of the Bratas of Bengal*. Calcutta: Firma K.L.M.

Sarkar,R.M.

1995 Meyeli Brat-Anushthaner Sarbajaninta. *Meyeli Brata Bisaye*.

Sanat Kumar Mitra(Ed.) Kalkata: Pustak Bipani.

Sengupta, Sankar

1970 *A Study of Women of Bengal*. Calcutta: Iundian Publications.

Thakur, Abanindranath

1919[43] *Banglar Brata*. Santiniketan: Bishwa-Bharati Univrsity.

Togawa, Masahiko

1997 *A Sakta-pitha in Bengal: Kingship, Caste and Sacrificial Organization in a Village Society*. The Ph.D. dissertation submitted to the Department of Sociology and Social Anthropology of North Bengal University, Siliguri, India.

1999 「ベンガルのプロト儀礼—アシャル月のビポッタリニ・プロトの事例から—」
【民俗宗教の地平】 春秋社1999年3月

【脚注】

- 1 モノシャ女神は、猛毒によって人々に災厄をもたらすヘビの神格であると同時に、そのヘビの危害から人々を守護する女神でもある。カリ女神は、良く知られているように、その獐猛な容姿と性質によって、夫をも踏みしだく女神として知られているが、同時にその強力な破壊力によって、敵を倒して人々の守護をなすのである [e.g. Togawa 1997]。
- 2 このうち最も広く読まれているものは、Majumdar [1992] である。このような民間伝承は、本来は地域社会や一族の内部で伝承されて、社会に根づいていたものであるが、このような活版印刷による説話集の普及は、逆にこのような個別的な女神祭祀の大衆化をもたらすことになったと考えられる点で興味深い。
- 3 この点については、特にBhattacharyya [1948]を参照されたい。特に通過儀礼におけるショスティ女神への祭祀は、とりわけヒンドゥー・サンスカーラ（シヨンスカル）のひとつに組み込まれた、生後6日目に行うショスティの儀礼が良く知られている。ここでは、子供の運命を司る神チットロゴビンド神（また、ショスティ女神自身とも言う）が子供の前に現われて、子供の額にその子の一生の運命を書き付けるとされる伝承としてベンガルでは良く知られた儀礼となっている。また、婚姻儀礼においても、このショスティ女神への祭祀が伴っていたという報告もある。これは、子供の成長を見守ってきたショスティ女神が、成人した子供を最後に見届ける場面であると同時に、新たに生まれてくる子供への祝福と将来への期待の場面ともなっている。しかし、今日では農村部でも、段階を追ったヒンドゥー・サンスカーラは省略されて、出産直後の儀礼と、生後6ヶ月後に行われる食初め式（オンノプロシオンノ）などに収斂してその祭祀が行われるようになっていく。調査地では、村の産婆（ダイ・マー）の役割を担うハリ・カーストの家の庭にはショスティ・トラが設けられている。ここでは、日常的な祭祀の他に、立ち会った子供の出産のたびに、このショスティ女神への祭祀がハリの女性によってなされている。

- 4 ベンガルのプロト儀礼の性格については、稿を改めて論じたい。その社会的枠組みに関する分析視角については、拙稿を参照されたい [外川 1999]。
- 5 ただし、S.R.ダスによると、ショステイ女神は、プラーナ文献においては、ドゥルガ女神に比定されていた [Das 1953:37]。
- 6 ただし、東ベンガルのパプナ、ボグラ地方ではこれは、アム・ショステイと呼ばれている。何よりも、ショステイ儀礼の中で、マンゴー（アム）が用いられるなければならないからとされている [Maity 1989:160]。
- 7 このような女性司祭を、現地ではベンガル語でプジャリニ／プロヒトニ（女性司祭）と呼んでいる。この女性司祭の社会的な位置づけについては、紙幅の都合から稿を改めて検討したい。
- 8 **Bhattacharyya** [1948]。
- 9 ビポッタリニ・プロト儀礼については、拙稿を参照されたい [外川 1999]。
- 10 ただし、人間の成長や運命を司る女神という意味では、ショステイ女神はジェンダーの区別をしていない。また、女性司祭による祭祀組織の構成は、最終的にはその夫であるブラフマン司祭のジャジマン・プロヒト関係に依存していると考えられる点などは、今後の検討課題として残されているといえるだろう。